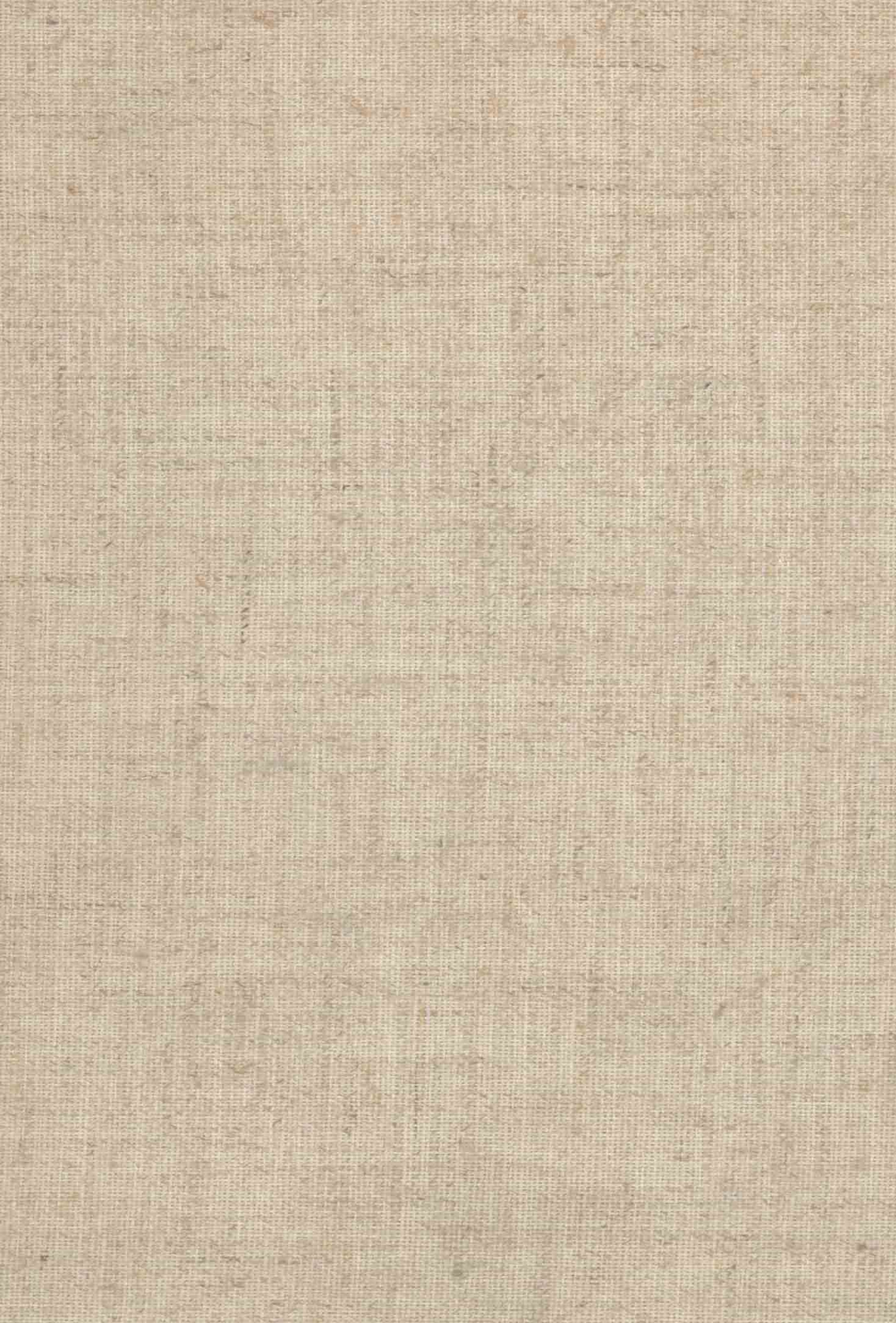




庄野潤三全集

庄野潤三全集 第八卷



昭和四十九年二月四日 第一刷発行

著 者 庄野潤三

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一〇二二
電話 東京(〇三)九四五一一(大代表)・振替 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社・株式会社興陽社

製本所 大製株式会社

製函所 株式会社岡山紙器所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
定価は函及び帯に表示しております

©庄野潤三 昭和四十九年 Printed in Japan

庄野潤三全集 第八卷
目次

△小えびの群れ▽

星空と三人の兄弟

尺 取 虫

バナマ草の親類

野菜の包み

さまよい歩く二人

戸外の祈り

小えびの群れ

秋 の 日

湖上の橋

雨 の 日

年 ころ

201 185 165 144 126 110 90 77 59 35 9

絵合せ*

蓮の花

221

仕事場

239

カーソルと獅子座の流星群

250

鉄の串

270

父母の国

282

写真家スナイダー氏

295

グランド・キャニオン

312

屋根

325

庄野潤三ノート

阪田寛夫

523

装　　幀・岩　本　正　雄

口絵写真撮影・野上透
（昭和48年9月、自宅書斎にて）

庄野潤三全集 第八卷

小えびの群れ

星空と三人の兄弟

一

グリム童話集に「こわがることをおぼえようと旅に出た男の話」というのがある。

先日——といっても、もうひと月以上前のことだが、私のところで夕食の最中にこの童話の話が出た。どうしてその話が出たかというと、最初、小学六年生の男の子が、友達のうちへ遊びに行った話をした。その友達の家というのは、私たちのいる丘からひとつ西の丘にある。

ほかに二人来て、みんなで四人で、田圃の横の川で泥鰌しんぎょを取ったり、柿の木に登って柿を取ったり、中学へ行っている友達のお兄さんに鳥のわなの作りかたを教えてもらったりして、よく晴れた秋の日に（その日は土曜日であった）お昼から日の暮れまで遊んだ。そうして、家に帰った。

友達のお父さんは大工をしていて、いつも仕事に出かけている。それで、家にはお母さんと兄さんが一人いるのだが、子供の話を聞いていると、その子の家が森の中の一軒家のように思えて来る。兄弟の会話、お母さんとその子の会話に、何やらのんびりしたおかしみがある。世間ばなれした

ところがある。それは、いく分、物悲しい話でもあった。

「グリム童話集に出て来る兄弟みたいだな」

と私はいった。

すると、みんなは平素、自分たちのしていることも忘れて、

「そうだ、そうだ」

「本当にグリムに出て来そうね」

といった。

それから、グリム童話集は面白い、アンデルセンはちっとも面白くないけれども、グリムは全く面白い、ということを書くと、アンデルセンの読者からきつと非難が出るに決っている。無茶なことをいう

なといわれるだろう。それは、お許し頂きたい。

ただ、この一家の気風というものを紹介するだけのことで、他意はない。アンデルセンの好きな家族もいれば、グリムの好きな家族もある。性に合う、性に合わないということは、どうにも致し方のないものなのだ。

それに、アンデルセンの童話は、アンデルセンその人がつくったものであるが、グリムの方は、それまでにドイツの国の方々に残っていた民話をグリム兄弟が探して歩いて、糸つむぎの女や農家のお婆さんから聞いて、集めたといわれている。片方は一人の作者の生み出したものであり、片方は長い間に語り伝えられて来た話をグリム兄弟がまとめたものである。

成り立ちがまるで違っている。

「あの話なんか、面白いわ」

と、細君がいった。

「ぞっとしたい、ぞっとしたいという男の子の話」

「ああ、あれ」

高校へ行っている上の男の子がいった。

「お化けがいっぱい出て来るお城へ行つて、泊るんでしよう」

「そう、三晩、泊るのね」

と、いちばん上の女の子がいった。

「三晩、寝ないで番をしたら、王様からお姫さまをくれるというので、行くの」

その話は、自分もよく覚えていいるというように、下の男の子は頷いた。

知らないのは、どうやら父親の私だけだった。

「それで、毎晩、お化けが次から次へと出て来て、みんな、やつつけてしまうんだ」

「黒猫が出て来て、トランプしようといったり、寝ているベッドがいきなりあばれ出したりするの

ね」

「へんな、身体が半分ずつで一つにつながった男が出て来て、玉ころがしをやるの」

「その玉がしゃれこうべなの」

なるほど、それだけ聞いただけで、どんなに物騒なお城であるかということは分る。

「それで」

と私はいった。

「無事にお城から帰つて来て、お姫さまと結婚するのか」

「ええ、でもそのあとがあるのね」

と、細君がいった。

「そんなに怖い目に合うんだけど、ぞっとするというのはどんなことか分らないの、その男の子は。それで、王様になってからでもまだ、ぞっとしたいなあ、ぞっとしたいなあ、といってるの」

「そしたら」

と上の女の子がいった。

「お后さまが、小川から取って来た、小さい魚がいっぱい入っている手桶の水を、眠っている若い王様にかけるの」

「その時、いうのね」

と、細君はその最後のところは自分にいわせてほしいというようにいった。

「わあ、ぞっとするとはどんなことか、はじめて分ったって」

その晩、私は子供の本棚からグリム童話集を取って来て、寢床で「こわがることをおぼえようと旅に出た男の話」を読んだ。

「あるおとうさんに、ふたりのむすこがありました」

そういう書き出しである。

この家族は、父親と男の兄弟の三人だけで、お母さんはいないらしい。どこにもお母さんがどういったというようなことは出て来ない。

例えば「ヘンゼルとグレーテル」だと、はじめに、ある大きな森の入口に、貧しいきこりが、おかみさんと二人の子どもといっしょに住んでいました、と書いてある。そうして、きこりのしゃべったことも、おかみさんのしゃべったことも、ちゃんと話の中に出て来る。

そうすると、やはり、「おとうさんに、ふたりのむすこがありました」というこの家族は、やめ暮しの父親と男の子が二人いる家らしい。

何も書いてはいないけれども、多分、お母さんは前に亡くなったのだろう。それで、男気ばかりの家になったのだろう。

兄の方は賢くて、物分りがいい。いわれたことは、何でも器用にやってのける。ところが弟の方は、ばかで、物分りが悪く、何ひとつ仕事を覚えられない。

そういう兄弟である。

だから、何か用事をいつけるとなると、みんな兄の方にまわって来る。父親は、どうかすると、夜中に何か持って来いと兄にいつけることがある。

それを取りに行く道が墓地の中を通っていたり、墓地でないとしても、墓地と変りのないくらい気味の悪いところであつたりする。

そんな時、兄の方はきつとこう答えた。

「いやですよ、おとうさん。そんなところへ行くのはごめんだな。ぞつとする」

いったいこのやめ暮しの父親は、夜中に何を取って来いと自分の子供にいつけたのだろう。よく分らない。

お母さんがいる時には、こういう用事をお母さんにいつけたのだろうか。

そうして、もしもお母さんが病気で死んだのだとすると、ここに出て来る墓地に埋葬されているのではないだろうか。そうかも知れない。それなら、いくらしっかり者の兄であっても、いやがるだろう。自分のお母さんが眠っている墓地なら、なおのこと、こわいと思うのではないだろうか。

また、この家のいろいろに時には近所の人が話しにやって来て、いろんな話をする。冬の夜語

りをする。

そんな折に誰かが怖ろしい話をして、聞いている者はみな口々に、

「ああ、ぞっとする」

という。

片隅に弟も坐っていて、その話を聞いているのだが、どうしてみんながぞっとするというのは、分らない。

「みんな、しょっちゅう、ぞっとする、ぞっとする、というけれど、ぼくはぞっとなんかしないや。これはきつと、ぼくには分らないわざらしいぞ」

そのうち、ある日、父親が下の男の子にいった。

「お前は身体も大きくなつたし、がっちりして来た。お前も何か仕事を覚えて、自分で食べていなくちゃいかん。見ろ、兄さんはあんなに一生けんめいにやっている」

すると、下の男の子は、

「ぼくだって何か覚えたいよ。ぼく、もし出来たら、ぞっとするということを覚えたいんだがなあ。これはぼくには、まだ何のことかさっぱり分らないから」

といった。

父親は、ため息をついて、

「ぞっとすることを覚えようというのか。それもよからう。だが、そんなことを覚えたって、御飯を食べてはいけないぞ」

私は、こういう会話に心を惹かれる。こういうところがあるので、魔法やお化けやその他さまざまなふしぎが、みんな生きて来るのではないか。